混物

大は小と異にして、而して有は資と同じからず。然りと雖も、成る者は應ずる有り。資る者は給する有り。故に之を有に資りて歸を一にし、之を各に成して物を立す。之を一有に資り、之を各體に成す。各物各天地は、終に各其の勢を張る。蓋し、持中なる者は、濁境なり。其の天は則ち氣は恬に風は動く。其の地は則ち山は峙ち水は俯す。其の昜は則ち燥火なり。其の会は則ち水溼なり。而して雲雨は上に出没し、動植は下に生化す。雲雨は濁中に浄く、動植は濁中に穢す。浄ければ則ち運爲、握歩の跡を没し、穢すれば則ち絪縕、交字の態を露す。蓋し、動植なる者は、天地間の小物なり。然りと雖も、我は動中の一物と爲りて、神中の一氣を具し、艸木に依り、天地に立す。故に眇たる一氣物、天地を人に於て開き、大物と勢を張る。植は則ち冷止無意なり。動は則ち溫動有意なり。夫れ物は天地を有し、氣は神本を具す。動は天物を成し、植は地物を成す。動は神氣を專らにし、植は本氣を專らにす。能く本氣を專らにして、而して地物を成す。故に植、其の神は則ち無意なり。其の體は則ち地に著く。能く神氣を專らにして、而して地物を成す。故に動、其の神は則ち有意なり。其の體は則ち天に居る。故に植體は、則ち内を實にして以て止り、冷を地の寒に資る。動體は、則ち内を虚にして以て動き、溫を燥の煦に資る。蓋し、大物の有は上下を以て、而して中外に居る。故に小物の資は本末を以て、而して上下に居る。然り而して、植は本を下にして末を上にし、動は本を上にして末を下にす。

一に於て有せられ、二に於て反す。故に、本氣を以て生を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、而れども冷止は我れ之を惡み、溫動は我れ之を好む。神氣を以て靈を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、有意は我に運し、無意は彼に運す。華榮し實種するは、則ち彼此同なりと雖も、彼は質實を以て、物を外に於て取り、生を下體に於て養う。實を上頭に於て結ぶ。此は氣虚を以て、物を内に於て取り、生を上竅に於て養い、子を下體に於て生ず。生を爲し命を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、而れども彼は根より生して、而して命は根に在り。此は首より生して、

而して命は首に在り。惟だ、有意を以て立する者は、有意に事有り。無意を以て立する者は、無意に事無し。是に於て、無意は、有意の事に混然たり。有意は、有意の事に粲然たり。既已に粲然たり。視聽聞味、思慮知辨は、其の物を有し、其の事を有す。偏なる者より之を觀れば、彼に無き者は我に有り。全なる者より之を觀れば、彼に混有する者は此に粲立す。是の故に、身を有する者は、本末内外を有す。動は外を實にし、植は内を實にす。而して動は上を本にし、植は下を本にす。本末内外、動植の同じき所なり。有意は向う所有り。向背は前後を爲す。前後有れば、必ず左右を有す。故に前後左右は、有意に分ち、無意に混ず。有意は、視聽聞味、知覺好惡を用う。故に、耳目鼻舌、意智情慾は、有意に分ち、無意に混ず。是れ、多少の有無の對を成す所なり。未だ混粲の分を知らず。多少の對に於て泥む。

大物は、坱坱に居りて、而して袞袞に從う。故に小も亦た天地に居りて、而して節序に從う。然り而して、植は華葉を配として、而して子苗に繼ぐ。動は牝牡を配として而して子母に繼ぐ。大物は、氣、其の物を運し、神、其の事を爲す。故に小も亦た、氣、其の物を運し、神、其の事を爲す。然り而して、植は止りて無意に運爲し、動は動きて有意に運爲す。蓋し、大なる者は機體象質なり。諸を風恬水陸に縮す。諸を彩聲氣性に釀す。故に動植は則ち其の風恬水陸に居りて、其の彩聲氣性を用す。

虛を天と爲し、實を地と爲す。風は轉旋し、恬は持立す。質は水を湛え、燥は陸に充つ。故に、風恬水陸なる者は、機體象質より成る。清を天と爲し、濁を地と爲す。靜は彩を呈し、動は聲を激す。熱は氣を發し、潤は性を收む。故に彩聲氣性なる者は、色性氣性より釀す。是を以て、風恬水陸の境は、則ち彩聲氣性の充つる所なり。故に、合して之を言えば、動植は、動靜燥溼にして物を爲し、彩聲氣性にして用を爲す。分ちて之を言えば、動體は動きて溼なり。能く彩聲氣性を發す。植體は止りて燥なり。能く彩聲氣性を收む。蓋し、動は質を取りて内を養なうの時、其の性を舌に於て覺る。之を味と謂う。氣を嗡いて内に通ずるの時、其の氣を鼻に於て覺る。之

を臭と謂う。故に、物に於ては則ち彩聲氣性なり。我に於ては則ち彩聲臭味なり。蓋し一なり。

大は則ち成らざる莫く、立せざる莫し。而して小は則ち大に資りて成り、物に依りて立つ。資れば則ち大に應じ、依れば則ち與に感ず。故に大物も、亦た本根精英を有す。小物も亦た本根精英を有す。

本を天と爲し、根を地と爲す。精は会を成し、華は昜を成す。故に天なる者は本なり。物は皆な之に資る。地なる者は根なり。物は皆な之に依る。精なる者は会なり。氣を物に於て隠す。華なる者は昜なり。體を氣に於て發す。故に、氣は本根精英を藏し、物は天地会昜を露す。天は地中に没し、地は天中に露す。根を爲す者は止り、本を爲す者は動く。故に、大通地塞は本を爲し、天虚地實は根を爲す。精は動止を隠し、英は發收を見す。蓋し神物の體は、神靈は事を運し、本根は物に體するを用す。是に於て、本氣は物を成し、神氣は事を爲す。事物なる者は露す。本神なる者は没す。天地は則ち本氣の成る所なり。天神は則ち神氣の成る所なり。經通緯塞、動轉靜持、天虚地實、昜發会收、此に於てせざる者莫し。故に大物は天地なり。小物は動植なり。大物は神本を有せば、則ち小物も亦た神本を有す。本氣は則ち彼此同名なり。神氣は則ち彼に神と謂い、此に意と謂う。物の異なるを以て、而して氣は異なり。氣の異なるを以て、而して名は別なり。一の剖するを以て、而して氣應ずる。氣應ずるを以て、而して名を通ず。動を有意と爲す。神氣の物なり。植を無意と爲す。本氣の物なり。而して神本は相い有し、動植は全成す。

成具は、則ち天神なり。天地なり。天は則ち定常なり。神は則ち變化なり。變化の地は、神靈感運成る。天は則ち乾明なり。地は則ち潤暗なり。潤暗の處は、水燥土石を成す。故に物は芸芸然たりと雖も、亦た惟だ一動一植のみ。動植は風恬の中に居る。水土の中に立ち、神靈の神を成す。感運の氣を用う。故に物は水燥土石に資る。以て氣液の生、骨肉の身を爲す。

潤暗結實、水燥は天に居る。土石は地を結ぶ。水燥は則ち雲雨に之き、土石は則ち動植に之く。動植は生を同じ

くして物を反す。故に、彼に根幹と曰い、此に身首と曰う。動植は物を分つと雖も、而も同じく之を有す。故に水燥土石は、我に於て得て、而して氣液骨肉なり。植は骨を欠けば、則ち剛を肉に於て寓す。血を欠けば、則ち潤を氣に於て寄す。此は溫動有意、彼は冷止無意なり。是に於て、其の有意の器は、彼に無くして我に有り。蓋し夫れ、人の身を爲すは、氣液骨肉なり。氣は溫動を分ち、液は膏血を分ち、肉は臟腑を分ち、骨は筋骨を分つ。膏に和して皮、外に成り、血に和して肉、内に成る。皮は能く物を裹む。肉は能く神を畜う。是の故に、府なる者は、物を納むるの名にして、皮の別名を爲す。藏なる者は、氣を藏するの名にして、肉の別名を爲す。臟は上體を爲し、腑は下體を爲す。上下の體成りて、神本の氣分る。

氣は神靈感運に資りて、以て心性の意、爲技の爲を爲す。

體の大分は、天なり、地なり。人なる者は、地中の一小物なり。故に、水燥土石は、我に得て而して氣液骨肉を爲す。氣の大分は、天なり、神なり。而して意なる者は、神中の一小氣なり。故に、神靈感運は我に得て、而して神靈爲技を爲す。神靈は意智の心を爲す。感運は情慾の性を爲す。相い和して運用の爲、言動の技を爲す。意智情慾、合して之を言えば、則ち意智と無く、情慾と無く、自然にして我に有するは則ち性なり。運爲して事に用するは則ち心なり。分ちて之を言えば、情慾の感應、自然に於いて發するは則ち性なり。意智の運爲、然ら使むるに用するは則ち心なり。然り而して、無意は則ち精靈自然にして、而して感應然ら使む。有意は、則ち感應自然に發して、而して知運然ら使む。天人の別なり。然り而して無意無作の神は、往來分合を爲す。有意有作の神は、運用言動を爲す。運用なる者は、心に於て爲す。故に爲と曰う。言動なる者は、外に於て發す。故に技と曰う。

然り而して、彩聲氣性は物に具し、好惡知覺は氣に具す。大は外より保し、小は内より保す。大は則ち内を質にす。小は則ち外を質にす。動植なる者は、小中の偶なり。意を用うれば、則ち氣液骨肉を分ち、意を舍つれば、則ち氣

液骨肉を合す。内を虚にすれば、則ち養を内より取り、内を實にすれば、則ち養を外より取る。故に植は彩聲臭味を呈す。動は彩聲臭味を用す。成れば則ち自から保し自から運し、依れば則ち或いは給し或いは資る。故に小物は、成るや則ち各自に保運し、立つや則ち互いに相い給資す。心性の意、爲技の爲、動は以て之を分ち、植は以て之を合す。分たざれば則ち之を混有し、合せざれば則ち之を粲立す。人は則ち物中の一物なり。意は則ち神中の一氣なり。人は己を有して以て其の境を開く。是に於て、己に非ざる者を併せて、己と之と勢を張る。故に、其の遇する所は皆な物にして、而して往く所は皆な天なり。

物なる者は天地に得て、而して物を成す者なり。物成りて而して天地と勢を張る。是に於て、天と神は竝び立ち、人と物は相い居る。故に、彼も能く没露し、此も亦た没露す。露中は則ち天地なり。我に得て乃ち身生なり。没中は則ち神本なり。我に得て亦た神本なり。

天に於いて資り、與に依りて立つ。故に、動植は天に同居し地に立つ。水燥を以て能く其の物を宅し、日影に從いて能く其の氣を行る。氣液骨肉、心性爲技、精より之を觀れば、彼此同じく有り。鹿より之を觀れば、彼此相い隔つ。故に、植の跡を混有に没するも、亦た其の氣は其の中に在り。動の跡を粲立に露するも、亦た其の氣は彼の外に在らず。故に我の立するや、同じく混粲の氣體を有す。神氣は體を混用し、本氣は體を粲成す。生體は神を粲有し、身體は本を混成す。體は則ち軀なり。軀は身生を以て立す。而して生は則ち氣液なり。身は則ち骨肉なり。氣なる者は一溫一動なり。而して溫は營衛を有し、動は息脈を有す。液なる者は一血一膏なり。而して血は津血を有す。膏は脂髓を有す。肉なる者は一臓一腑なり。而して臓腑は各おの内外を分ち、骨なる者、一筋一骨なり。而して筋骨も亦た内外を分つ。混氣は則ち神なり。神は意爲を以て成る。而して、意は則ち心性、爲は則ち爲技なり。

地の水燥土石は、乃ち人の氣液骨肉なり。故に水の氣を爲すや、氣の質に之くなり。質に之きて未だ質を定めず。是に於てか、水は猶お氣のごとくなり。是を以て、氣は則ち溫、液は則ち潤なり。故に、其の生くるや、之を摸

すれば則ち溫、之を傷つければ則ち血、其の死するや、之を摸して溫を得ず。之を傷つけて血を見ず。是に於て觀る。氣の物を爲すや、死すれば則ち之を亡す。物の物を爲すや、死すと雖も之を留むるを。故に、動植を合して之を言えば、神氣は爲技なり。動植を分ちて之を言えば、植に神氣爲技と爲し、動に心性爲技と爲す。蓋し神の物を爲すは、物に主として、而して物を用うる者なり。物に主として、而して體を爲さざるなり。體を爲さざると雖も而も物を没中に成す。爲技とは、惟だ其の發して事を爲す者なり。

心なる者は、一意一智なり。而して意に思慮有り。智に知辨有り。性なる者は、一情一慾なり。而して情に愛憎有り。慾に欲惡有り。爲なる者は、一運一爲なり。而して運に運行有り。爲に立持有り。技なる者は、一聲一技なり。而して聲に和激有り。技に守禦有り。

氣は、我の燥なり。液は、我の水なり。肉は、我の土なり。骨は、我の石なり。神情は、我に於ては心性を爲し、造化は、我に於ては爲技を爲す。天地の我と同じき所なり。而して、彼なる者は、地質を内に結びて、天氣を外に轉ず。我なる者は、骨肉を外に護して、溫動を内に保す。是れ天地の我と反する所なり。然り而して、氣に溫動有り。液に膏血有り。肉に臟腑有り。骨に筋骨有り。心に意智有り。性に情慾有り。爲に運爲有り。技に言動有り。而して愛憎欲惡なる者は、好惡なり。思慮知辨なる者は、知覺なり。物に好惡知覺を有せざる者無し。蓋し人の大分は、意と身となり。而して身は生と偶し、意は爲と對す。身生なる者は、動の天地なり。意爲なる者は、動の性才なり。蓋し天地の條理は、質は必ず冷止す。氣は必ず溫動す。而して植質は冷にして、動質の溫なる者は、何ぞ。質に動止の異有ればなり。性情爲技なる者は、動植の共に有する所なり。惟だ意に於て相い有無するのみ。植は地に就きて竪立す。地の類なり。故に意の神を冷止に於て舍つ。動は天に在りて横行す。天の類なり。故に意の神を溫動に於て寓す。溫動なる者は生なり。氣血は之に繫がる。形體なる者は身なり。骨肉は之を成す。質體なる者は、冷止の物なり。神を有して此の中に動く。是れ其の體の溫なる所なり。蓋し天地なる者

は、偏寒偏熱を以てして成る者なり。然り而して、動なる者は、溫動の氣を以て、冷止の質に和す。和合は以て活し、乖離は以て化す。化すれば則ち溫去り冷生ず。以て質の自然なるを觀る。活すれば則ち冷去り溫醸す。以て氣の使然なるを知る。氣は溫にして動す。血は溫にして活す。故に、血の體に充つるは、存すれば則ち滾滾として充ち、死すれば則ち倏忽として失す。是れに由りて之を觀るに、血なる者は、活動の氣化なるや、明らけし。故に、血なる者は、氣の化なり。氣を得て骨肉の實質と對す。是に於てか、骨肉氣血は親を爲す。以て能く好惡知覺す。此の故に、感應の運爲する所、性に於て有る者は、神に於て之れ有り。是の故に、意の有無は動植に於て分ると雖も、而も動中も亦た此の有無を平分す。故に生の好惡知覺は、無意に於てし、心の好惡知覺は、有意に於てす。同じく是れ神爲なり。同じく是れ神爲なりと雖も、而も其の爲は則ち反す。反に由りて同を觀す。同に由りて反を觀す。其の態は識る可し。粗ぼ其の　槩　を擧げて以て之を言わんに、勞逸を知り、睡覺を知り、痛苦を知るは、皆な無意の神爲なり。適否を知り、蔽悟を知り、憂樂を知るは、皆な有意の神爲なり。是を以て、好惡知覺、有意無意、相い應ず。是を以て、生に痛有れば、則ち心も亦た悼有り。生に痒有れば、則ち心も亦た痒有り。痛は呻吟を爲し、悼は哭泣を爲す。身、痒ければ則ち爪搔く。心、痒ければ則ち歯切る。身、麻すれば則ち左右の運動する所無し。心、癡なれば則ち進退の運爲する所無し。人の会肌を摸せば、則ち肌は羞らいて口は笑う。人の会事を訐けば、則ち身は羞らいて心は笑う。人の肌肉を割けば、則ち肉傷んで氣痛む。人の親戚を割けば、則ち、情傷んで心痛む。氣は鬱して病み、達して快す。心は鬱して悶え、達して安ず。氣を病めば則ち身を癈し、知を病めば則ち徳を壊す。是れ乃ち天人の應なり。然り而して、情慾は、有意の感應なり。意智は、有意の知運なり。體は耳目鼻舌、手足会乳の文を有す。而して其の爲は萬變す。心は意智情慾、運用營施の事を有す。而して其の運は錯綜す。爲は虚實守禦を爲して、而して愛憎欲惡は其の間に成る。意は思慮知辨を運して、而して善惡是非は其の中に出づ。

粲體は則ち文なり。體は臓腑を以て成る。而して臓は則ち内臓外臓、腑は則ち内腑外腑なり。内臓は上下を分ちて、上は則ち心肺、下は則ち肝腎なり。外臓は上下を分ちて、上は則ち耳目、下は則ち鼻舌なり。内腑は上下を分ちて、上は則ち咽胃、下は則ち腸脛なり。外腑は上下を分ちて、上は則ち会乳、下は則ち手足なり。

獣は必ず身を俯す。身を俯すれば則ち横たわる。横たわれば則ち手足は下に在りて、会乳は上に在り。人は身を竪にするを以て、其の體を異にするのみ。

粲氣は則ち體の文に從うの氣なり。其の氣は本神を以て成る。而して神は則ち内神外神なり。本は則ち内本外本なり。内神は精麁を用う。而して精は以て保運し、麁は以て化持す。外神は精麁を用う。而して精は以て視聴し、麁は以て聞味す。内本は精麁を用いて、而して精は以て納畜す。麁は以て收送す。外本は精麁を用いて、而して精は以て交字す。麁は以て舞踏す。混氣物なる者は體なり。諸を大物に資り、以て己の有と爲す。粲氣物なる者は文なり。諸を身生に得て、以て己の神を用う。植も亦た多種なり。動も亦た多種なり。資給は同じからずして、通塞は各異なるなり。然りと雖も、動中、意智の巧を極め、造化の機を弄する者は、人、之を最と爲す。故に、我が境よりして、而して有意を推し、無意を察す。混資は己を成し、粲立は佗を用う。混體は、則ち本根の身生なり。内外臓腑の文を粲立す。混氣は、則ち精英の神爲なり。内外本神の文を粲立す。

天地天神なる者は、我を成するの氣なり。彩聲臭味なる者は、我が交る所の氣なり。而して氣は豈に啻に此の四のみならんや。寒熱淫燥は膚に覺り、善惡是非は心に覺り、輕重は捧うるに覺り、強弱は持するに覺り、堅輭は摸するに覺り、毒藥は養するに覺る。配嗣器地なる者は、我を立するの質なり。水穀便溺なる者は、我を寄するの質なり。而して質は豈に此の四のみならんや。絺綌裘帛は、寒暑に切なり。門牆干戈は守禦に切なり。藥餌は疾病に切なり。枕席は臥寐に切なり。惟だ彼の氣質の各おの八なる者は、動の至切なる者なるのみ。此の故に、魚に耳無く、鳥に脘無し。艸木は配偶に假らず。魚介は手足に假らず。瞽者は色に假らず。聾者は聲に假らず。

精英は能く本根に發し、本根は能く精英を收む。故に天は以て己を成し、神は以て己を用す。故に本根なる所の者は、胚胎に兆し、黄壤を貫く。精英なる所の者は、後れて榮し先んじて謝す。晝は神に夜は昏し。故に、正しければ則ち治り、病めば則ち亂る。是を以て、神の軀に居る、之れを生と爲す。軀の神を喪う、之れを死と爲す。

氣は無體を以て動き、質は有質を以て止る。氣聚まれば則ち體結び、體解くれば則ち氣散ず。暴露する者は、體は必ず早壞す。佗無し。氣の散じ易きを以てなり。蟄藏する者は、體は必ず久持す。佗無し。氣の洩れざるを以てなり。心なる者は氣の華なり。身なる者は氣の根なり。氣なる者は、動き易く佚し難し。故に心は宜しく恬澹を以て養うべし。體なる者は、靜を好み勞を惡む。故に身は宜しく動を以て作養すべし。

神は軀を役す。之れを覺と爲す。軀は神を役す。之れを夢と爲す。

視聽なる者は、耳目の氣なり。舞踏なる者は、手足の氣なり。而して好惡思辨なる者は、神氣なり。氣は本根を爲し、心は英華を爲す。心は固に一身の主なり。四肢百骸、皆な其の役を爲す。是の故に、心は能く使令し、氣は能く命を聽けば、則ち耳目は視聽し、手足は舞踏す。心は令すと雖も、而も氣　聽かざれば、則ち聾盲癱瘓、癲狂妄動す。心は尊しと雖も、而も親自すること能わず。氣は卑しと雖も、而も用を作すこと己に由る。老壯病健は、惟だ氣の從なり。是を以て、心は氣を役すれば、則ち視聽云爲、自から正し。覺の事なり。氣は心を役すれば、則ち神は耳目を視聽に於て役せず。反って視聽する所の氣に於て役せらる。心は手腳を舞踏に於て役せず。反って舞踏する所の氣に於て役せらる。夢の事なり。故に、正有り、邪有り、感有り、背有り、前事を記する有り。將來を知る有り。思う所に由る有り。思わざる所を得る有り。愛す可く、惡む可く、驚く可く、樂しむ可し。其の狀は千萬と雖も、惟だ心の氣に於て役せらるるに由るのみ。本根は困しめば則ち精華病む。精華病めば則ち本根苦しむ。憂悲思慮なる者は、心の病なり。痛痒饑渴なる者は、氣の病なり。心、勞せば則ち氣困しむ。氣、病めば則ち心苦しむ。是を以て、魑魅は神を毒す。疾病は心を亂す。則ち恍惚は夢覺を分たず。徒らに視て徒ら

に聽き、徒らに舞いて徒らに踏むのみ。神明、主を爲して、號令、嚴肅なれば、則ち肢體は各おの命を待ちて、而して皆な用を一心に統ぶるなり。

生の身に充つる、之れを壯と爲す。身の生を散ずる、之れを老と爲す。生の神に旺する、之れを寐と爲す。神の生に旺する。之れを寤と爲す。

氣は來れば則ち充ち、往けば則ち散ず。而して、寤寐なる者は、神本の更るがわる政を爲すなり。夢覺なる者は、神本の更るがわる役を爲すなり。

故に神は其の權を執れば則ち正し。其の權を失えば則ち狂す。

生の本根を爲すは、猶お國の衆を以て基と爲るがごときなり。心の英華を爲すは、猶お國の君を以て主と爲るがごときなり。夫れ、朝廷なる者は、禮樂文物の在る所、聡明才徳の居る所、號令控掣の由る所なり。郊野なる者は、禮樂文物に於て足らず。聡明才徳に於て乏し。亦た號令控掣の權を有せず。前後左右、仰ぎて之を上に於て待つ者なり。故に、上は控掣の權を執りて、以て下を馭し。下は號令の命を奉じて、以て上に聽けば、則ち能く太平を致す。上は聡明の徳を失して、而して下を監すること能わず。下は控掣の權を竊んで、以て上を犯せば、則ち終に擾亂を致す。故に氣なる者は、心の基なり。心なる者は、氣の主なり。心は號令控掣し、以て能く氣を役使し、氣は動靜云爲し、皆な命を待ちて爲す。是の故に、氣は苟くも痛痒恐懼する有れば、則ち懊惱戰愕し、心の制を受けず。心は苟くも感激憤發する有れば、則ち重傷大疵し、自覺せざるなり。是れ主客の事なり。夫れ視聽舞踏なる者は、氣の爲す所なり。耳目の視聽を役し、手腳の舞踏を役する者は、心の爲す所なり。心令し氣聽けば、則ち、視て其の色を辨じ、聽きて其の聲を辨じ、舞いて其の節に中り。踏みて其の地を得るは、人の正なり。心は之を令するを知らざれば、氣は徒らに其の用を爲して、視て其の色を辨ぜず。聽きて其の聲を辨ぜず。云いて其の言を擇ばず。爲して其の事を擇ばず。是れ之を狂と爲す。上下は序を有し、治安は謀る可し。位序は

未だ分れずんば、烏んぞ治を謂うを得ん。下、苟くも上に於て聽かずんば、則ち衆は　各　其の用を爲す。國に於ては、則ち亂を爲し亡を爲し、人に於ては、則ち癲を爲し狂を爲す。主、權柄を專らにすれば、則ち衆は役使に於て困しむ。國に於ては、則ち弊を爲し危を爲す。人に於ては、則ち病を爲し死を爲す。

其の精を守れば則ち眞なり。其の主を喪えば則ち妄なり。

神なる者は、心の精爽なり。是を以て、目を病めば、則ち大虛に蚊虻を見る。耳を病めば、則ち漠中に蟬雀を聞く。夫れ病邪は元と内に在り。而して聲色は妄を外に於て爲す。心は精爽を失せざれば、則ち聲色の眞妄を辨ず。心は精爽を失すれば、則ち必ず蚊虻を撲し、蟬雀を驅る。病まざる者は、妄狀を視聽に於て認めず。病む者は、則ち妄狀を視聽に於て認む。故に神正しくして、而して衆と同じく視聽す。是れ其の眞なり。神病んで、而して佗と視聽を別にす。是れ其の妄なり。物は已に象形を具す。孰れか目に於て逃れん。何となれば則ち面前の色、目に於て印し、目の神、接して物を鑑す。左右の聲、耳に於て感じ、耳の神、受けて聲を辨ず。色は目に印せず。聲は耳に感ぜず。而して色と聲とを成す者は、豈に外に在る者ならんや。故に心は邪の爲に役せられ、其の視聽擧動をして、物に對するが如くならしむる者は、實に妄狀のみ。何ぞ眼華、耳鳴、睡語、夢影と異ならん。

故に生は其の可に適すれば則ち和し、其の否に遇えば則ち勞す。

天地なる者は、一寒一熱なり。而して我が身は、則ち寒熱に和して溫、戾れば則ち偏寒偏熱を生ず。天地なる者は、一燥一溼なり。而して我が身は、則ち燥溼を合して中に、偏れば則ち偏燥偏溼を成す。此の故に寒暑を衝き、雨雪を冒し、饑飽に過ぎ、嗜好に淫す。力の及ばざる所に役し、智の能わざる所に勞す。彼の勞苦の事は、皆な職として此れ之に由る。

其の養を得れば則ち健なり。其の毒に遇えば則ち病なり。

食色器貨、淫すれば則ち人を毒す。寒熱風溼、忤らえば則ち人を毒す。水火金石、触るれば則ち人を毒す。諂佞

便戾、親しめば則ち人を毒す。

故に意は爲を具すれば則ち性なり。爲の意を能するは則ち才なり。思なる者は、意の物に於て運するなり。業なる者は、物の意に於て運するなり。是に於て、交接の間、意は順忤を有す。態は治亂を爲す。是の故に、人は天地の給する所に資る。萬物の立する所に依る。故に、大物は神を給す。我は資りて意と爲す。大物は爲を給す。我は資りて爲と爲す。意は則ち心性なり。性なる者は、神の給する所なり。心なる者は、靈の給する所なり。故に情慾なる者は、神の物と交接する所、感應の態なり。意智なる者は、靈の物と交接する所、運營の態なり。爲なる者は、神爲の自から用うる所なり。技なる者は、靈爲の佗を用うる所なり。故に運爲なる者は、氣體を運行立持するなり。聲技なる者は、氣體を和激守禦するなり。夫れ物は天地の間に竝立して、而して彼此は交接を爲す。是の故に、情は外に感じ、而して愛憎は動く。慾は内に應じて、而して欲惡を出す。

情なる者は、心の氣に感ずるなり。慾なる者は、氣の心に感ずるなり。是を以て、心なる者は内に在りて、而して用を外に於て爲す。物は牽けば則ち愛憎に外に於て從う。體なる者は外に在りて、而して事を内に於て用す。身は動き而して色食を内に於て求む。我の愛憎は、佗の美醜吉凶よりす。酸鼻の隱、甘心の忍、毎に之を内に於て快にして、而して之を外に於て伸ばさんを思う。他の聲色服飾は、我の耳目口體の爲にして求む。輿馬粉黛の美、絲竹羞饌の具、常に之を前に於て備えて、而して之を内に於て　恣　にせんと欲す。内に求むれば則ち外は之に從う。外に從がえば則ち内は之を求む。

意は運して思慮は神なり。智は營して知辨は靈なり。

愛憎の施する所、親疏を致す。欲惡の接する所、悅怨を動かす。人の美を愛すれば則ち羨む。己の美を愛すれば則ち矜る。己の惡を惡めば則ち羞ず。人の美を惡めば則ち妬む。思に順忤有りて、而して喜怒應ず。慮は肅舒有りて、而して憂歡成る。智は吉凶を解き、而して哀樂を感ず。辨は得失を分ち、而して悔咎　生ず。且つ情は、

注ぎて慕う。背きて斁う。合を欲して求め、分を惡みて惜み、意は、鬱して慍なり。暢して驕なり。智は、素にして愨なり。飾って詐なり。思の存亡する所、記忘有り。智の動止する所、信疑有り。辨を事物に於て用うれば、則ち美醜を分ち、道を進退に於て考うれば、則ち榮辱を成す。此の故に、神は、劫かす所有れば則ち驚き、危ぶむ所有れば則ち畏る。痛む所有れば則ち泣く。弄する所有れば則ち笑い、病む所有れば則ち苦しむ。役する所有れば則ち勞す。

運は以て氣體を運行し、爲は以て氣體を立持す。音聲を發して、而して虛實を見す。

爲の精を用うる。一は則ち聲を發し、一は則ち技を發す。技に發する者は、守禦に爲し、聲に發する者は、和激に在り。守禦の技は、或いは歯角に於てし、或いは距觜に於てし、或いは首尾に於てす。而して人は則ち專ら手足に於てす。和激の發は、笑泣喜怒を　各　發す。或いは音聲を羽脰に於て發する者有り。或いは聲音を假らざる者有り。人なる者は、意爲に長ずる者なり。故に、聲音を弄して、而して言語の文を爲す。手足を役して、而して千百の事業を爲す。故に人は、意を適否に於て運す。而して善惡歧す。智を當否に於て用す。而して是非作る。情を口舌に於て吐して、而して虛實成り、慾を手足に於て施して、而して守禦起る。是を以て、物の已に分るる、己に切にして佗に疏す。切なる者を守らんと欲す。故に害する者を禦ぐ。故に學と曰う。禮と曰う。仁と曰う。義と曰う。業と曰う。務と曰う。藥餌と曰う。飲食と曰う。而して千萬なる者は、皆な守の事なり。衣服と曰う。牆屋と曰う。軍旅と曰う。城郭と曰う。戒と曰う。禁と曰う。禱と曰う。刑と曰う。而して千萬なる者は、皆な禦の事なり。守禦を務むるの間、物を弄するの工は、一正一誕、一護一訐、虛實の間なり。正なる者は、直なり、質なり。護する者は、以て褒し、以て覆う。而して千萬なり。誕なる者は、詐なり、誣なり。訐なる者は、以て犯し、以て害す。而して千萬なり。故に寓する者は、言に虛すと雖も、而も意に實す。訐なる者は、事に實すと雖も、而も意に虛す。或いは言に正うして、而して意に曲なり。或いは言に迂にして、而して事に敏な

り。故に情を以て之を言えば、一虚一實なり。事を以て之を言えば、虚實は共に可否なり。動作を發して、而して守禦を爲す。

人と物と。同じく口舌手腳を具し、同じく聲音營施を具す。物の聲音營施は、自使混然たり。人の聲音營施は、自使粲焉たり。自使混然とは何ぞや。鳴けば則ち其の聲は自から發し、動けば則ち其の技は自から露す。自使粲焉とは何ぞや。泣笑は、自から憂樂に於て發し、而して歌哭は轉折を以て分る。舞踏は自から動作に於て成し、而して技巧は意匠に由て變ず。有意の能、意匠を轉折して、神靈の妙を囀し、鼓舞の巧を弄す。是れ乃ち、人の獨り有する所にして、而して別に吼囀飛走の外に發す。聲音は轉折して、而して事物は狀を無形に於て成す。之を言語と謂う。之を咨嗟咏嘆して、而して歌曲を作る。之を序して律呂を爲す。技巧は經營して、而して事物は體を有形に於て成す。之を事業と謂う。之を文章修飾して、而して禮樂を爲す。之を虚にして跡を爲し、之を實にして器を爲す。聲を認めて書を爲し、型を摸して畫を爲す。言語なる者は、意智情慾を聲音に於て轉ずる者なり。事業なる者は、意智情慾を技巧に於て舞する者なり。言語の道は、心に生して、而して聲に發す。耳に受けて、而して心に辨す。心に生して、而して聲に發する者は、虚も亦た狀を成し、實も亦た狀を成す。或いは素を以て之を直にす。或いは文を以て之を飾る。或いは野を以て之を出だす。或いは誕を以て之を欺く。耳に受けて、而して心に辨ずる者は、或いは以て之を信ず。或いは以て之を疑う。信疑の間に虚實して、而して言に成る者は千萬なり。動作の事は、心に發して、而して身に動く。我に出でて、而して彼に見る。心に發して、而して身に動く者は、以て能く守り、以て能く禦す。守や、以て身を修し、以て産を治す。禦や、以て微を慎み、以て備を修す。我に出でて、而して彼に見るる者は、或いは以て往き、或いは以て來る。往來の中に守禦して、行に成る者は千萬なり。此の故に、好を出だし戎を興し、禍を締び福を致す。心性に機し、而して言行に定む。是に於て、文の以て其の用を具し、猶お人の府庫を設けて、錢帛を置き、門戸を開きて、出入りを爲すがごとし。

故に、肺は天氣を保し、肝は地氣を化し、心は其の神を運し、腎は其の天を持す。咽は水穀を納め、胃は水穀を畜え、脬は其の浄を泌別し、腸は其の穢を送輸す。耳目鼻舌は、彩聲臭味を通じ、会乳手足は、配嗣器地を用す。

粲氣は、則ち物に接するの氣なり。粲體は、則ち意を用うるの器なり。是を以て、神本の氣は、上下の體に居る。精麁の氣は、内外の體を雑う。是に於て、肺肝心腎、耳目鼻舌、保運化持、視聽聞味す。咽胃腸脬、手足会乳、納畜收送、舞踏交字す。上體を臓と爲し、下體を腑と爲す。而して臓腑は各おの内外を有す。内臓、中は則ち心なり。端は則ち腎肺肝なり。外臓、中は則ち舌なり。端は則ち鼻耳目なり。内腑、中は則ち胃なり。端は則ち咽腸脬なり。外腑、中は則ち会なり。端は則ち手足なり。神氣は神なり。本氣は天なり。而して神本は各おの内外を有す。内神は、精以て神本の氣を運持す。麁以て天地の氣を保化す。外神は、精以て聲色を視聽し、麁以て臭味を聞味す。内本は、精以て水穀を納畜し、麁以て便溺を收送す。外本は、精以て配嗣に交字し、麁以て器地に舞踏す。

混然たる體用は、以て物を合し、粲然たる氣物は、以て神を開く。鳥獸鱗甲。大抵は相い類す。惟だ人は、則を天地に於て觀て、以て道を立つ。爲を設施に於て開きて、以て禮を制す。修は以て亂を防ぎ、荒は以て治を擾す。是れ物の無き所にして、而して人事の關鍵なり。夫れ水陸なる者は、持中の兩天地なり。堅輭の動植は、擾擾として其の間に竝び立つ。神爲變化、有無通塞、具に有る所を盡すなり。蓋し物の將に生ぜんとするや、其の氣は混混沌沌たり。惟だ神は淳淳として、天地を其の中に於て存す。其の既に化するや、其の物は汪汪洋洋たり。惟だ氣は衰衰として、其の物を天地に於て一にす。生は、本生を有し、餘生を有す。餘生は或は氣を以てして化し、本生は必ず形を以てして傳う。

水陸の艸木鳥獸は、之を本生と謂い、水陸の蟲豸菌苔は、之を餘生と謂う。本生は條理の正を守り、餘生は條理の變を盡す。本生は正中に變を盡し、餘生は變中に正を含む。是を以て、鳥獸は正形にして、而して鱗甲は其の

變を盡す。笹樹は正形にして、而して卉蔓は其の變を盡す。是を以て、人は則ち竪立し、獸は則ち横行す。我は則ち神靈を具し、物は則ち聡慧に乏し。獸は則ち肉脣なり。鳥は則ち骨觜なり。獸は食し鳥は啄す。鼬は嗡い魚は呑む。獸は則ち食息し、魚は則ち呑吐す。鱆は、腹を以て頭の處に安んず。蛇は、腹を以て手足の用を爲す。象は、鼻を以て指と爲し、猿は、足を以て手と爲す。馬は鼻を以て牛の舌に代え、牛は舌を以て馬の鼻に代う。鳥は、寢るに方りて人の坐るが如く、人は、伏すに方りて魚の行くに似る。鳥は則ち尿無し。蟬は則ち屎無し。牛馬は力に勝り、貓犬は捷に勝る。鳥は手を以て翼と爲し、魚は鬣を以て肢に代う。諸生は、口孱の處を異にす。鱆は則ち口孱の處を一にす。人は、清潔を好む。烏鳶は則ち臭穢を喜ぶ。蝙蝠は倒懸し、螺は則ち倒行す。鰕は後に向いて跳ね、蟹は旁に向いて行く。諸動は、則ち内骨外肉なり。甲介は、則ち外骨内肉なり。鳥の羽翼は、則ち魚の鱗鬣なり。牛馬の脣舌は、則ち獸の手指なり。鷗鷺は能く水に著き、人は則ち好んで火を執る。望潮は頭を没し、水母は骨無し。水魚は瞑せず、土蟲は息せず。蟻は髭を以て視、魚は目を以て聽く。蟷螂は竪口なり。蚊虻は長舌なり。蜂は則ち満面皆な目なり。蛛は則ち満身皆な腹なり。鸚鵡と河豚とは、瞼、獸の如し。鯢魚と蟾蜍とは、體、獸に似る。鼯鼠は則ち獸にして翅なり。鯪鯉は則ち鱗にして毛なり。龜は獸の如くして卵生す。鱷は鱗の類にして胎生す。蠶類は、則ち卵にして蠶。蠶にして蛹。蛹にして蛾なり。蟾蜍は、則ち胞にして蝌蚪。蝌蚪にして手腳を生ず。禽獸は、則ち專ら聲音を口に於て用う。羽蟲は、則ち專ら聲音を羽に於て用う。然り而して魚鼈は則ち聲音を用いること少なり。人の技に於る、學んで後に成る。物の技に於る、習わずして得る。牡蠣石蚓は、含靈にして生を艸木に類し、石螺石蛤は、動形にして體を土石に類す。苔蘇は枝葉を假らず。菌寓は、全く艸木に異なれり。

形の傳うる所、牝牡は感應し、胎を其の中に託す。軀殼は開析し、其の物、始めて成る。植の子や、或いは肉を殼にし、或いは皮を殼にす。動の子や、或いは卵を殼にし、或いは胞を殼にす。殼を繫くるの處は、植に之を帶と謂

い、動に之を臍と謂う。鱗比相い繼ぐの痕は、或いは亡し或いは存す。葉布き花發し、種殼を其の中に於て繋ぐ。牡感じ牝應じ、子胞を其の中に於て託す。故に、男女の情なる者は、發生の感にして、而して子母の愛なる者は、保生の應なり。物の生は、之を天に於て資る。物の養は、之を物に於て取る。故に日は影を以てして養う。燥は水を以てして養う。

己は天を以てして生じ、己は天を以てして死す。其の已に生じ未だ死せざる、能く持して此の體を存す。持存の間、生事を有す。是れ之を養と曰う。養事に反す。是れ之を害と曰う。天は之を養うに氣を以てす。地は之を養うに質を以てす。天は之を害するに氣を以てす。地は之を害するに物を以てす。艸木は寒暑を得て、而して天に養われ、水土を得て、而して地に養わる。鳥獸は噓噏を得て、而して天に養われ、飲食を得て、而して地に養わる。氛袗瘴癘は、能く動植を氣に於て害す。水火金石は、能く動植を質に於て害す。

故に動植は生を天に於て得て、養を物に於て取る。内實する者は、外より養い、内虚する者は、内より養う。同じく諸を氣質に取りて成る。

植は、無意にして止りて、大地の養を没爲に於て待つ。動は、有意にして動きて、天地の養を有爲に於て作る。蓋し、内實する者は、養を外に於て取り、内虚する者は、養を内に於て取る。故に、彼の生を奪いて、我が生に給す。是に於て、殺活の道有り。是の故に、物の天は、動を殺して我の生を保する者有り。植を殺して我の生を保する者有り。故に保生の道は、彼を殺して我を保するに非ざる者莫し。惟だ植なる者は無意なり。故に慘怛の憾無し。動なる者は有意なり。慘怛の意多し。惟だ豺虎鷹鸇より、蟷螂蟾蜍の屬に至りて、動を殺して以て生を保す。馬牛羊豕より。蝶蛾の類に至りて、植を殺して以て生を保す。人は、則ち動植を得て、之を水火に於て調し、能く其の生を保す。然りと雖も、其の稟性は、慘怛を愍んで、而して殺の醜事を忌む。

故に本氣は内に保運し、神氣は外に爲技す。故に混然たる氣體、動植は同く之を有し、粲然たる氣體、植は動の用

を舍（す）つ。